



●サンゴに埋もれた謎のくらし ーサンゴフジツボの仲間ー

すっかり夏になりました。ミドリイシの一番大きな産卵時期は過ぎ、サンゴの繁殖もひと山こえた感じです。それでも、今月も26日の満月から次の半月（下弦の月）にかけての夜には、いろいろな種類のサンゴが卵を産むことでしょう。調査をしていてじっとサンゴを観察すると、ときどきサンゴに変な模様があることに気がつきます。どうやらそれはサンゴの中に別の生き物が埋もれているせいのようなのですが、今回はそのサンゴに埋もれている生き物、サンゴフジツボの話をしてしましよう。

フジツボという動物のことは、みなさん知っているでしょうか。岩にくっついていて火山のような形をしたあれです。貝の仲間と思っている人も多いようですが、実はエビやカニと同じ甲殻類です。移動することはありませんが、火山

の火口にあたる部分から熊手（落ち葉などを集める掃除道具）のような脚をのぼして、海中のプランクトンなどをこし集めて餌にします。同じ仲間のエボシガイのことを以前のアムスルだより No. 30 で紹介しましたし、冬に慶良間にやってくるザトウクジラの体に大きなフジツボがついていることを知っている人もいるかもしれません。そしてサンゴフジツボは、その名のとおり、特別にサンゴにくっついて暮らすフジツボの仲間です。

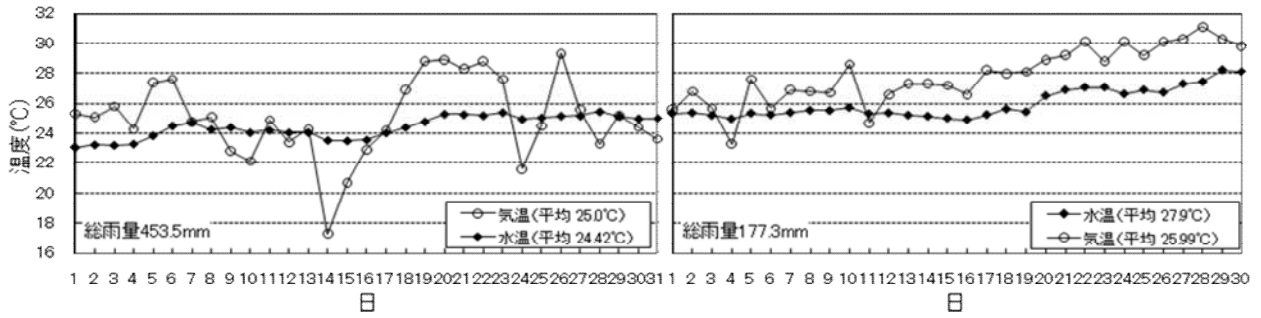
サンゴフジツボにもいろいろな種類があり、世界中には40数種、日本には23種くらいいると考えられています。これまでに研究所にはこのフジツボを研究するために数人の研究者が訪ねてきていて、その結果、慶良間の海からは14種（不確定の3種を含む）が見つけられています。そして、その中には当時世界で3例目というとても珍しい種も含まれています。また、沖縄では初めて記録された種も多く、日本の中でも慶良間はサンゴフジツボの種類の豊富な場所なのかもしれません。

これらのサンゴフジツボは、やたらめったらサンゴにくっついていてはではなく、どうやらフジツボの種類ごとに好みのサンゴがあるようです。たとえば、ボタンサンゴフジツボはキクメイシ属やリュウキュウキッカサンゴ属のサンゴに良くついていますし、フクレサンゴフジツボはミドリイシ属やアナサンゴ属サン

定点観測

2010年5月

2010年6月



ゴで見つかります。ヒドロサンゴフジツボにいたっては、アナサンゴモドキ類にしか生息していません。いったいどんな仕組みで、つくサンゴを選ぶのでしょうか。フジツボも、海底にくっついて暮らすほかの生物と同じように、生まれて間もなくは幼生として海中を漂っていて、やがて適当な場所を探してくっつき、親のフジツボと同じ姿になって成長していくのですが、そのくっつく場所を探すときに、サンゴから出ている化学物質を感じ取っているのではないかと考えられています。けれども、幼生を準備したり飼育したりするのがむずかしいのか、まだあまり研究が進んでおらず、まだ多くの謎が残されているようです。

また、どうしてサンゴフジツボはサンゴにくっついてくっついてくっついて暮らすのか、サンゴフジツボとサンゴの関係についてもまだ十分にわかっていません。この2つの動物がくっついて暮らすことで、どちらかに、または両方に何か得なことがあるのでしょうか。サンゴフジツボの中には、サンゴを食べると考えられている種もいますし、サンゴフジツボの多くの種の脚（先ほど書いた‘熊手’の部分）にはギザギザがついていて、どうやら脚を動かすと、このギザギザがサンゴの肉をけずり、サンゴに覆われてしまうのを防



写真1 脚を伸ばしたサンゴフジツボ

いでいるのではないかと考えられています。こうした考えをみると、サンゴフジツボとサンゴはお互いに助け合っている関係ではなく、サンゴフジツボが一方的に得をしながらサンゴに寄生しているように思えます。

サンゴフジツボは、みなさんにはなじみのない動物かもしれませんが、ちょっと注意して見るといろいろなサンゴで見つけることができます。とくにイタアナサンゴモドキやカンボクアナサンゴモドキには、ほとんど全部にフジツボがついています。それにもかかわらず、まだまだ謎だらけの動物です。謎を解き明かしていけば、サンゴとサンゴフジツボの進化の道のりについても新しい発見があるかもしれません。

● 阿嘉島の海より

6月のはじめに阿嘉島のマジノハマでサンゴの産卵があり、今年も阿嘉小学校の子供たちとサンゴの産卵を観察しました。また、海での観察会に参加できなかった子供たち、慶留間校の子供たちや先生と一緒に水槽の中で産卵するサンゴを観察しました。自然のサンゴの産卵はもちろん感動的ですが、水槽の中で産卵するサンゴをみんなでわいわい言いながら観察するのもまた違った楽しさがあります。

